

# くりかえし学習できるローマ字教材の発行

## 教材活用シリーズ 第70回

☆日図協加盟出版社の発行している教材について、実際の授業における活用例、より効果が得られるポイント（場面・方法）などを紹介します。

(株)新学社  
『わくわくローマ字練習』  
(小学校三年生国語教材)

(株)新学社  
小学事業部編集部

### 1. はじめに

ローマ字は、平成二十三年度の学習指導要領で、小学校四年生から三年生に移動した学習内容である。今後、コンピュータでローマ字入力する機会も増えていくため、早い段階で学習することとなった。

小学校三年生でローマ字を学習するためには、従来よりもわかりやすく、しっかりと習得できる教材が必要となってくる。弊社では、学校現場からのさまざまな要望を反映して、平成二十五年に『わくわくローマ字練習』を全面改訂した。

### 2. 企画

各社から発刊されているローマ字教材は、すべてB5判で、横開き型と縦開き型に二分される（弊社も、B5判・横開き型だった）。学校調査では、机が小さいので、縦開きのほうが使いやすい、という結果が出た。



従来の教材（B4判・横開き）

また、小学校三年生では、B5判では小さいのではないかと、という感触も得た。小学校一・二年生で使用される教材は、A4判が主流である。ローマ字も、大きな判型のほうが使いやすいのではないかと考えたのである。

判型を大きくすることによって、どのようなメリットを生み出すことができるだろうか。ひとつは、文字のサイズを大きくすることである。ローマ字を初めて習う児童は、見本となる字をよく見て書き写していくことになる。そのため、字が大きく見やすいことはとても重要である、という話を、現場からうかがった。

もうひとつは、判型が大きいので、繰り返し書いて学習できるスペースが作れるということである。そこで、弊社の『わくわくローマ字練習』は、A4判にすることで、三回繰り返し書くことができるようにした。ローマ字は、何度も書くことによつて、しっかりと覚えることができる。

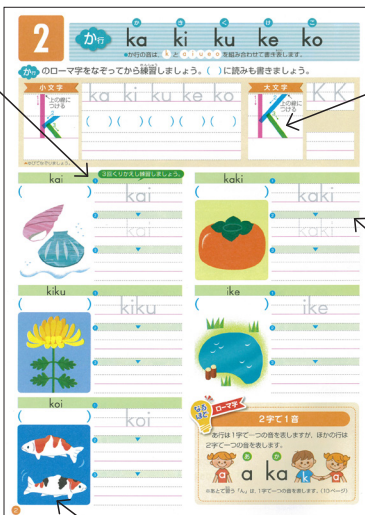
さらに、一冊を学習し終わったあとに、本当に定着したかどうか、確認できるテストも必要ではないかと考えた。そこで、付録として、「たしかめプリント」（B4判・1色）をつけることにした。

この段階で、再度、学校現場で、企画についての意見をうかがった。すると、ローマ字については授業時間が多くないので、練習量が多いと使い切れない、という声もあった。しかし逆に、授業時間が短いからこそ、きちんと力が身につくような教材が必要だ、という意見もあった。賛否両論という状態だったのである。

とても迷ったが、現在は〈学力向上〉が重視される傾向が強い。従来よりも学習量が多いロー

①・②・③の番号で、3回繰り返しを強調。

A 4判（大判）



大きな手本の文字。

3回繰り返し練習できる。

明るく、大きなイラスト。

付録の「たしかめプリント」（B 4判）

\*一冊が終わったあとに確認できる



①三回繰り返し書くことで、しっかり身につく。  
②「たしかめプリント」で、定着したかどうか確認できる。

マ字教材を支持する先生は多いのではないかと予想し、この企画で制作することに決定した。この教材の特長は、次の二点ということになる。

3. 制作

制作は、これまで幼児教材を作ってきた社員がメインで担当した。小学校三年生で使用するため、デザインやイラストなども、明るくわかりやすいものにする必要があった。そこで、以前より、学校教材で絵を使いたい、と考えていたイラストレーター（てづかあけみさん）に連絡を取り、本文中のほとんどのイラストの作成をお願いすることができた。

また、「三回繰り返し」ということを強調するために、誌面に①・②・③の番号を入れるなどの工夫も行った。

それから、表紙については、絵のなかからロー

A 4判の大きな版型



ローマ字をさがすゲームができる表紙

4. 結果

マ字を探す、というゲームができるようにした。表紙としてはやや地味な絵柄になったのだが、遊びの要素を入れることにこだわった。結果的にはこれが好評で、授業の導入などに使用することができたそうである。

制作時間がとても短かったのだが、国語課全員の協力により、何とか十二月に間に合わせる事ができた。翌年の初めから、PRを行うことができた。見本には、特長をまとめたシールを貼るようにした。

5. 終わりに

ローマ字教材は、テストやドリルと比べて宣伝する機会は少ないといえよう。けれども、四月から注文は増え続けた。ローマ字は二期以降に授業が行われることもあるので、夏ごろまで注文は入ってくる。最終的には、前年度比一五〇パーセント以上という結果を残すことができたのである。

『わくわくローマ字練習』では、教材のコンセプトを明確にすることを心掛けた。他社の教材が多いなかで、判型や繰り返し学習という面で、違いがはっきりと目に見えるようにしたのである。当初は、「分量的に多すぎるのではないか」という不安もあったのだが、ローマ字をしっかりと学習させたい、と考える先生のニーズに適合した教材を提供することができたように思う。コンセプトの重要性を、改めて実感した教材であった。